



ヒーラー・エスメラルダのヒーリング治療院で蓮也は治療をしヘティスはヒーリングを学んでいた。

ヘティスはヒーリングをしていたある日、狩りでドラゴンにやられ重症を負わされた男性患者が来た。

エスメラルダ

「・・・命の危険がある人が優先だけど」

「命の火が消えかけています」

「残念ながら、この人はもう助からないわ・・・」

エスメラルダは、周囲に聴こえないようにヘティスに小さな声で言った。

ヘティス

「この人は先日も怪我で来てくれた人だわ」

「あの時は痛みが消えたって喜んでくれたのに・・・」

エスメラルダ

「ヘティス、これ以上苦しめないように痛みを消してあげて」

ヘティス

「・・・はい」

腹部の傷口が痛々しいため、ヘティスは目を背けたくなくなったが、ヒーリングをするために、しっかりと、その傷口に顔を向け、手をかざし、エネルギーを送った。

男性患者には家族がいて、持っていたペンダントを妻に渡して欲しいと言い、ヘティスはそれを約束した。やがて男性は息を引き取ったが、ヘティスのヒーリングのお陰か、安らかな表情であった。

人の死に立ち会ったのははじめての体験であった。

ヘティスの緑の瞳からは、涙がこぼれ落ちていた。

それを見た汎用性AIロボットのヘパイトスが声をかける。

ヘパイトス

「・・・涙」

「ヘティス、泣いているのか？」

ヘティス

「そうよ」

ヘパイトス

「何で泣いている？」

ヘティス

「誰かが死んじゃったら人間は泣くものよ」

「この人には奥さんがいて、子供がいて、その人たちのことを考えると悲しくなるわ」

ヘパイトス

「人間とは悲しいものであり、苦しいものだな」



その日はショックのため、ヘティスは少し早めに宿舎に帰り、早めに休むことにした。次の日は、幾分、気持ちも持ち直したので、再びヒーリング治療院でヒーリングの修行をすることにした。

治療院の受付はエウリュノメーという美しい女性が行っている。髪はブラウンでソバージュがかかっており、その髪には花が飾られていた。一見、人間に見えるが、彼女はゴーレムである。ゴーレムとは、レベルの高い魔術師が泥人形に魔法をかけたものである。見た目は人間と殆ど変わらないが、目が人間より大きく、瞳の比率が大きい、動作や喋り方がややぎこちないため、この時代の人はゴーレムだとすぐにわかる。

ヘティス
「あれ？エウちゃん、今日も頭のお花が増えてるね」

エウリュノメー
「はい、増えてます」

ヘティス
(このコ、毎日、頭のお花が増えてるんだけど、少しつけ過ぎよね～)
(どうしちゃったんだろ)

エウリュノメーの頭には初日から花が飾られていたが、毎日、ヘティスが見るたびに増えていった。それと、少し変わったことと言えば、ヘパイトスが朝早くから動き出していることであった。ヘパイトスは汎用性 AI ロボットであり、朝の弱いヘティスを起こす役割をしていた。

ヘティス
(へパ、いつも朝早くにどこいくんだらう？まあ、ちゃんと帰って来て起こしてくれるからいいけど)

ヘティスは気になったので、ある日、ヘパイトスが部屋から出て行ったのを確認し、気づかれぬように後を追ってみることにした。ヘパイトスは村の外れの小川にいた。それをヘティスは木陰から見ていた。

ヘティス
(あれ、へパ、お花をあんなにたくさん持ってるけど、どうするんだらう)

すると、ゴーレムのエウリュノメーがやってくる。

ヘティス
(あ、エウちゃん！)

エウリュノメーとヘパイトスは見つめ合っている。しばらくすると、ヘパイトスは手に持っていた花をエウリュノメーに渡す。すると、エウリュノメーは、その花を髪につける。

ヘティス



(なるほど～、だからエウちゃん、頭のお花が増えてたのね)
(けど、何でお花なんかを渡しているんだろう)
(も、もしかして、へパはエウちゃんに恋しちゃったのかしら！)
(・・・これは大事件だわ！)
(AI って恋するの？ゴーレムはどうなんだろう？)

ヘティスが聞き耳を立て、へパイトスとエウリュノメーの会話を聞いてみたが、聞いたこともない言語で会話していた。

ヘティス
(・・・これって、ゴーレム語？ロボット語？)

二人だけの独自言語のようである。

しばらくするとエウリュノメーは帰って行った。
今度はフワフワとポコーが飛んできて、へパイトスに近寄る。

しばらくするとエウリュノメーは帰って行った。
今度はフワフワとポコーが飛んできて、へパイトスに近寄る。

ポコー
「ぽーっこっこっこ！」
「俺の言った通りポコ！」
「女性は花が大好きポコよ」
「花を送れば送るほど、女性はお前のことを好きになってくれるポコ」

へパイトスはうなずいている。
どうやらポコーがレクチャーをしているようだ。

ヘティス
(何ソレ～、女の子はそんな単純なものじゃないわ！)
(あれじゃ、エウちゃんの頭がお花畑になっちゃうじゃないの！)

ポコーのレクチャーは続く。

ポコー
「これだけ花を送ったからには、相手はもうお前にメロメロポコ！」
「次のミッションは、花を渡したら彼女を抱きしめるポコ！」
「そして押し倒してチューするポコおおお！」
「もし女性が“いや、やめて”って言っても、それはOKと言っているポコ！」
「いやよ、いやよもなんとやらポコ」
「女性とはそういうものポコおおお！」

それを聞いたヘティスがへパイトスとポコーの前に出ていく。



ヘティス

「ちょっと妖怪！私のへパに無茶苦茶なことを教えないで！」

ポコー

「よ、妖怪じゃないポコ、妖精ポコ！」

ヘティス

「女の子を無理やり押し倒すなんてダメに決まっているでしょ！」

「それに、無理やり押し倒して嫌がってたら、それは嫌に決まっているでしょ！」

ポコー

「ちょっと急用を思い出したポコ」

「今日のレクチャーはこれまでポコ」

と言ってポコーはフワフワと何方ともなく飛んでいった。

ヘティス

「何よ、アイツ～」

「ねえ、へパ、エウちゃんが好きなの？」

へパイトスは頬を赤らめた。

ヘティス

「アンタも結構隅におけないわねえ」

「けどね、ポコーの言うことなんて聞いちゃだめよ」

へパイトス

「そうなのか？」

ヘティス

「そりゃ、そうよ。だって、私は女の子だし、あのポコーは多分・・・オスかな？」

「女性のことを聞いたら、女性から聞いた方がいいでしょ？」

へパイトス

「女性のことを知るには、女性であるヘティスの言うことの方が正しい確率が高いと思います」

ヘティス

「でしょ？」

「だからね、私がレクチャーしてあげる」

へパイトス

「おねがいします」

ヘティス

「まず、確かに女の子はお花が好きよ。だけど、あんなにはいらないわ。だから、あれで十分よ」

へパイトス

「そうなのか」

ヘティス

「そうよ」

「それよりも気持ちが一番大事。へパ、あなたが彼女のことを好きだって伝えることが大事よ」

へパイトス



「それを伝えようとする変な感じがする」

ヘティス

「それは恥ずかしいって気持ちとか、断られたらどうしようって気持ちとかね」

「色々入り混じった気持ちかもしれないけどね」

ヘパイトス

「どうすればいい？」

ヘティス

「勇気を出して、想いを放つの！」

「愛してる、って！」

ヘパイトス

「ユウキ、オモイヲハナツ」

「アイシテル」

ヘティス

「そうよ」

「あと、無理やり押し倒しちゃダメ」

ヘパイトス

「押し倒していいか聞けばいいのか？」

ヘティス

「そうじゃないわ。相手をやさしく見つめてね、雰囲気とかムードとか空気感とかあるじゃない。それを感じて、そっと、やさしく抱きしめるの」

ヘパイトス

「雰囲気、ムード、空気というものは学術的には暗黙知に属し、そのようなデータは登録されておりません」

ヘティス

「なんかアンタ、小難しいことを言うわね～」

「そうやってアタマで考えるんじゃなくて、全身で何かを感じるの」

「そして、ハートを開いて、想いを放つの」

ヘパイトスはわかったような、わからないような感じで去って行った。

そして、次の日、ヘパイトスは朝早く出かけていった。

それをヘティスは気づかれないように追跡する。

いつもの小川でヘパイトスとエウリュノメーは会っている。

ヘティス

(ヘパ、うまくやるのよ～)

(なんか思春期の息子を持ったお母さんになった気分だわ)

(こっちが緊張してきちゃった)

いつものように花を彼女に渡し、しばらく見つめ合う。

彼女が微笑む。

ヘパイトスはそっと彼女の肩に手を回し、ゆっくりと抱き寄せた。

そして二人はしばらくの間抱き合った。

それを木陰で見守っていたヘティスは安心して帰っていく。

ヘティス

MB
BS
(よかった、エウちゃんもへパのことを好きみたいだし)
(けど、びっくりだわ。AI とゴーレムの恋なんて。もし現代だったら週刊誌にスクープされるわ)

(まあ、両思いみたいだし、よかった・・・)
(私は蓮也のことが・・・けど蓮也は他の人のことが・・・)
(あの時、あんなに強く抱きしめるから、私は彼のことが・・・)

ヘティスはしゃがみ込み、彼女の瞳から大粒の涙がこぼれ落ちる。
気づくと側にヘパイトスがいた。

ヘパイトス
「ヘティス、今度は何で泣いている？」
ヘティス
「へパ〜！」

ヘパイトスはヘティスの頭をやさしく撫でる。

ヘティス
「ねえ、へパ、あなたはエウちゃんが好きだけど、エウちゃんはあなたが好きじゃなかったら悲しいでしょ？」
ヘパイトス
「それは悲しい」
ヘティス
「そんな気持ちなのよ」
ヘパイトス
「人間とは切ないもの、苦しいものだな」

ヘティスは自身の想いをヘパイトスに聴いてもらい、思い切り泣いて、少しスッキリした。胸のハートのモヤモヤしたエネルギーも少し落ち着いたようだ。
その日も、ヘティスは、ヒーリング治療院に学びに行った。
ヒーラー・エスメラルダは、ヘティスのハートの状態を観察しつつ、ヘティスを導いていた。

エスメラルダ
「ヘティス、今日はお産に立ち会いなさい」
ヘティス
「え〜、私、はじめてです！」
エスメラルダ
「もちろん、私の助手としてなので大丈夫よ」
ヘティス
「はい！」

ヒーリングルームではベッドの上に苦しんでいる妊婦の姿があった。
この妊婦は、先日、ヘティスが看取った男性の妻であった。ニダーナ（因縁）はヒーリングエネルギーを活性化させるため、ニダーナを知ることはヒーリングの開始を知ることと



される。そのためエスメラルダはヘティスを立ち合わせている。その妊婦は、夫を亡くしたストレスも関係しているのか、かなりの難産になるのかもしれない。そうしたことをエスメラルダはヘティスに伝えられた。

エスメラルダ

「痛みが強そうね、ヘティス、まず黄色のオーラで痛みを止めて」

ヘティス

「はい！」

ヘティスは黄色の光をイメージし、患者のお腹に手を当てる。患者の苦しみの表情が幾分和らぐ。

エスメラルダ

「次は少し落ち着かせるために、左手で頭部に青のオーラ、バランスをとるために右手は緑のオーラ」

二つの色の光をそれぞれイメージするのはヘティスにとって大変だった。

エスメラルダ

「もうすぐ生まれるわ」

元気な男の子の赤ちゃんが生まれた。

ヘティス

(あの時の亡くなった人の奥さんがここにいる、そして、また今、新たな命が生まれた)

ヘティスは色々な気持ちが込み上げてきて、気づいたら、目から涙が流れていた。

ヘパイトス

「涙・・・」

「ヘティス、また悲しいのか？」

ヘティス

「ううん、今度は多分、嬉しいのよ」

ヘパイトス

「なんでだ？」

ヘティス

「新しい命が誕生したからよ。こういう時に人は喜ぶものよ」

ヘパイトス

「悲しんでも、喜んでも、人間は涙するのか」

ヘティス

「そうよ」

ヘパイトス

「人間とは、複雑なものだな」



女性はその場で、夫に因んだ名前をつけた。もしかしたら、夫の生まれ変わりかもしれない、と思ったのかもしれない。

それからしばらく日が経った、ある日。

ヘティス

「あれ？今日は、エウちゃん、見ないわね」

エスメラルダ

「エウリュノメーは寝てるわ。もう、魔法の半減期が過ぎようとしている・・・」

ヘティス

「え？魔法が切れちゃうってこと？切れちゃうとどうなるんですか？」

エスメラルダ

「土に帰るのよ」

少し前からエウリュノメーは半減期が過ぎようとする兆候が出ていた。そのため、殆ど自室のベッドの上にあった。しかし、不思議なことにヘティスたちが来てからは、魔法エネルギーが戻ったかのように動き出していた。特に朝は、どこかに元気に出かけているのをエスメラルダは見ている。そして、その理由もわかっていた。

エウリュノメー

「ヘパイトスを呼んでくれる？」

ヘティス

「・・・はい！」

ヘティスはヘパイトスを呼んで、エウリュノメーの部屋へと一緒に入った。

ベッドにはエウリュノメーが静かに横たわっている。

部屋には、ヘパイトスが彼女にあげた花が花瓶に入れられ、机や棚にたくさん並べられている。

エスメラルダ

「このコ、お花は大切なものだから捨てないでくれ、と私に言ったの」

「おかげで家中の花瓶がなくなっちゃって部屋がお花畑よ」

ヘティス

「こんなにもたくさん・・・」

ヘパイトスが近寄ると、彼女は意識を取り戻し、手を差し出す。

その手にヘパイトスはやさしく触れる。

エウリュノメー

「ヘパイトス、来てくれてありがとう」

ヘパイトス

「また、お花あげるから元気になってほしい」

エウリュノメー

「ありがとう、私にたくさんのお花と想いを」

「私は嬉しかった」



「アナタがやさしく接してくれて」

ヘパイトス

「また小川にいこう」

エウリュノメー

「あなたと小川を毎日眺めるのがとても幸せでした」

「けど、もう無理みたい」

最後の別れの挨拶が終わり、ヘティスとヘパイトスは部屋から出た。

ヘティス

「看取ってあげないんですか？」

エスメラルダ

「エウリュノメーは見られたくない、って言ってたの。最後、自分が土になってしまう姿を。多分、好きな人には、一番綺麗な姿を見せていたかったと思うの。だから、そっとしておいてあげて」

ヘティス

(その気持ち、とてもわかる・・・)

エスメラルダ

「数十年、ゴーレムとして生きてきて、初めて普通の女性として接してくれたのがヘパイトス、あなたでした。毎日、朝出かける様子がとても嬉しそうで。私の方からもお礼を言わせてもらうわ」

そう言ってエスメラルダは、再び、エウリュノメーの部屋へと入っていく。

ヘパイトス

「涙が・・・」

「これが悲しい、苦しいって感覚なんだな」

ヘティスはハンカチでヘパイトスの涙をやさしく拭く。

しばらくして、エスメラルダが出て来ると、小さなペンダントを持ってきた。

エスメラルダ

「このペンダントの中にはエウリュノメーの土が入っているの。これをヘパイトス、あなたに差し上げます」

ペンダントはネジタイプになっており、しっかりと締められている。その中に、土となったエウリュノメーの一部が入っている。ヘパイトスはペンダントをもらい受けると、すぐに首にかけた。そして、ヘパイトスは涙を流していた。

ヘパイトス

「胸があたたかい、私の中に彼女がいるようだ」

「また、涙が・・・」

「今度の涙は、さっきの涙とは違う感じがする・・・」

ヘティスは再び、ヘパイトスの涙をハンカチで拭く。

